

【報告】

なぜ今、葬儀研究プロジェクトなのか？

丘山 新

総合研究所では、平成25年度より葬儀研究プロジェクト（日本によい葬儀を）を開始した。なぜ今、葬儀研究プロジェクトなのか？

現代日本において、「葬式仏教」「葬儀不用論」あるいは「直葬」「簡易葬」などのおさまさまな議論があり、また葬儀に関する書物や雑誌が多く発刊され、社会的な問題ともなっている。

ところで、葬儀と僧侶が歴史的にどういう関係にあったかに関しては様々な研究書もあり、それらに譲るとして、つい最近まで葬儀に宗教者、特に仏教僧侶はほぼ不可欠の存在であった。葬儀とはまさに葬送の儀礼であり、宗教者が執り行う事柄であるからこそ儀礼であるのだ。

それにも関わらず、上記の議論は僧侶から提議されたものではなく、いずれも僧侶以外の識者やマスコミが提起し、それが現実のひとつの潮流となったものである。これまで、仏教者、仏教教団は、仏教者以外の人たちが作った葬儀に関する議論の「土俵」に登場することさえなく、議論がかみ合っていなかったのが現状である。

このような状況の中で、私たちが始める葬儀研究プロジェクトとは、僧侶、仏教教団の側から積極的に葬儀に

関する議論の土俵をつくり、死生観などをも視野に入れ、葬儀というものを広義に扱い、総合的に検討し、「よい葬儀」を日本の文化に創出していこうという試みである。

これまでも葬儀に関する研究書は多く発刊されている。しかし、それらは必ずしも葬儀のあり方を現実に変えていくような方向性にはない。また、仏教教団でも葬儀のあり方を改善すべくさまざまな試みがなされているが、その試みは前記の研究とは逆に、現実的なまた個人的な試みであり、死生観なども含めた理論的基礎が不十分であることが多い。

本プロジェクトは、従来の研究や実践的な試みの成果をふまえ、死生観や死後観という多くの人びとにとって切実な基礎的な問題からと始め、葬儀の意味の問い直し、さらには現場の僧侶たちとの協働により実践的にも葬儀のあり方をより良いものとする試みをも含めてすすめられることになるであろう。

そもそも、仏教とは「生老病死」の四苦と「愛別離苦」などの八苦に代表される人間の苦悩を克服することを目指すものである。そして現代に生きる人びともまた、さまざまな苦悩を持ちつつ、精神的なよりどころを求め、仏教関係の講演会には人びとが集まり、仏教書が多数刊行され、売れていく。

それにもかかわらず、人びとは伝統仏教教団や僧侶には多くを期待せず、現代の伝統仏教教団は「葬式仏教」と揶揄されて久しい。伝統仏教教団も、それぞれの宗派がさまざまに社会活動をすすめてはいるが、しかし多くの人びとの精神的な要望に十全に応えているとは言えないのが現状であろう。

そのような現状のなかで、仏教教団は以下の二点を喫緊の課題として真剣に取り組むことが必要である。

第一点として、伝統仏教教団は、教団があるからそれをいかに護っていくかという視点だけでなく、そもそも

宗教にとって教団や寺院とはどのような意味を持っていたのか、宗教組織が現代的にはどのような意味をもちうるのかを宗教者自身で問い直す必要がある。ただし、それは宗教教団の社会的意義や公共性といった外的な要請からの問いだけではなく、宗教そのものの内発的な必然性が問われるべきであろう。もう少し分かりやすくいえば、自己の内面を見つめ、自己のあり方を常に問いつつ、精神の根底に絶対的な安穩を見だし、他者に寄り添いながら生きていくこと、それこそが宗教者の生き方の原点であろう。そういう宗教者が集う場所こそが仏教寺院である。そうであつてこそ、現代の多くの人びとの期待に応えうる仏教となるであろう。

さて、第二点は、広義での葬儀の課題である。

葬儀に関しては、以下の諸点が問題となる。

(1) 現代日本の各寺院にとって、葬儀に関する一連の儀式は、寺院の経済的基盤として重要な意味をもっている。しかし、諸外国の宗教や日本の新興宗教は、葬儀を必ずしもその経済的基盤としているわけではない。彼らの経済的基盤は、葬儀以外の宗教活動による収入・寄付からなっている。そのような視点から、伝統仏教教団は教団活動の基本的なあり方と、その財政的基盤を抜本的に問い直すことも必要であろう。

(2) そもそも、葬儀とは何か？

葬儀不用論が世を賑わせ、あるいは葬儀をおこなわずに火葬のみで遺骨を埋葬する直葬や僧侶抜き簡易葬が増加しつつある。葬儀における「僧侶離れ」とでも言うべき現象である。前項で指摘したように、このような現状は経済的にも伝統仏教教団にとって深刻な問題である。

しかし、私たちにとってさらに深刻なことは、このような状況は日本の文化の問題そのものである、という点

である。これは文化の貧困化、精神の劣化であり、実に嘆くべき問題なのだ。

いつたい、この世に命あるものとして誕生すること、そしてこの世における命の終焉とは、人生における最大の二大行事である。葬儀とは、亡くなりゆく人にとつても、見送る人びとにとつても、限りなく意味深いことだからである。だからこそ、古くから、それぞれの民族とその精神文化において、葬儀という儀礼が執り行われてきたのである。その意味で、葬儀のあり方は、その民族の精神文化の在りようを典型的に示していると言えよう。すなわち、その形式や規模はさまざまであれ、葬儀をいかに考え、執り行うかということは、この世での生の意味、生きていくことの意味、あるいは命の大切さの意味をどのように考えるかという問いに直結している。このような意味からしても、葬儀を軽視しつつあるように見える現代日本の時代思潮は、精神文化の深刻な問題であると言えよう。

さらにまた次のようにも言えよう。生きることと死ぬこととは、ひとつの命の二つの側面である。だからこそ、生を問うことは死を問うことに連なり、死を問うことは現に生きていくことの意味を問うことに他ならない。

死を考えることは、いづれ訪れてくる将来の事柄を思考することではなく、まさに今、どのように生きるかを考えることでもある。

葬儀とは、このような、日常ではあまり考えることがない、しかし大変に重要なことにフツと思いをいたす機会でもある。

これまで指摘してきたことから、葬儀という課題が、単に葬儀という儀礼をいかに執り行うかという限定された問題ではなく、それは寺院の存続にとつて切実な問題であるといった事柄に終始する事柄に矮小化されるも

のではないことが解ろう。葬儀とは、まさに生きることの意味、この命の意味を問うことでもあり、文化の精神の問題でもある。葬儀をめぐる課題はあまりにも多様で、また深く思想的な問題でもあり、「解決」とか「結論」のあるものでもない。

私たちの葬儀プロジェクトは一応三年を一つの区切りにはしているものの、それはまさに「事の始まり」に過ぎない。来年度以降、徐々にそれなりの成果を公表し、様々な実践的課題にも取り組んでいく計画である。このプロジェクトが、現在浄土真宗本願寺派の各教区、各組、各寺院での葬儀関係をめぐるさまざまな取り組みと連動し、〈日本によい葬儀〉という大きな流れをつくるきっかけになるよう努力していきたい。